

# 学校で「美術」を学ぶ最後の1年間で 社会における「文化芸術」の意義と視点に迫る

膳所高校（滋賀・県立）

## ひとし 山崎仁嗣先生

教員歴23年。2006年に膳所高校着任。出会った学芸員が偶然高校の先輩だったり、恩師が絵画指導をした福祉施設の作品を集めた美術館と連携したり、縁のつながりで連携授業を推進。

山崎先生と取材に協力してくれた生徒さん（写真左から、津田啓生君、長船慈子さん、山崎先生、馬場咲良さん、南沙希さん、田中倫さん）



鑑賞や創作を通して、  
自分や他者の考えを  
言語化して考える力をつけたい

どんな授業なのか

美術に「連携授業」と  
「言語活動」を多様に導入

「高校教育における芸術科目の位置づけとは？」。現在、膳所高校の美術科を担当する山崎仁嗣先生は、前任の中高一貫校時代に、そんな疑問をもつようになった。美術は中学では全員が履修し、高校では選択科目となる。その際に、書道、音楽の他の芸術科目に比べて、美

術は得意であるか、消去法的に選択する傾向があった。

「『不得意だけど美術は好き』という生徒が選択したくなる、美術の学び方はないものかと。特に当校のような進学校では、将来的に美術を専門とする生徒は極めて少数派です。『人生で美術を学ぶ最後の1年』に、『絵が上手だから面白い』で終わるのではなく、美術で学んだことが社会に出たときにつながりを感じられる授業をつくれなにかと考えました」

授業設計を構想するにあたって、学習指導要領を読み直してみた。

「『伝統文化に関する教育や、言語活動、体験活動の充実』が改善事項として記されています。また協働する学び方も求められています。これらを授業に取り込めれば、美術でも社会で必要な力を育めるはずだと思ったのです」

同じころ、全国高等学校美術工芸教育研究大会が滋賀県で開催された。そこで美術教育をサポートするNPOや美術館の学芸員など、外部の人々との出会いがあった。

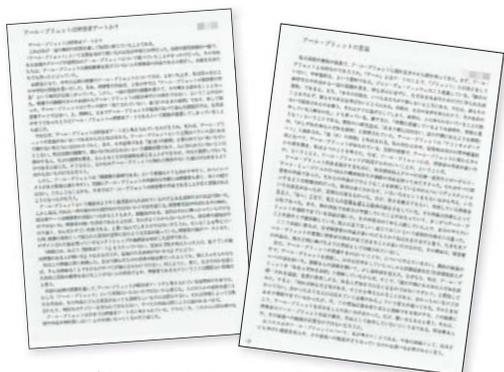
「外の世界の人とのつながりは小旅行のような楽しさがあります。誰かとお会うと何かが起こる。その発見を生徒たちにも体験してほしいと思いました。私個人でやるよりも外部の人に補ってもらえば、生徒に早くたくさん世界のことを知らせることができます」

単なる外部講師を呼んでの連携授業ではなく、生徒たちが感じたこと、考

えたことをその都度言語化させるためにワークシートを取り入れたり、小論文を書かせる授業を構成した。その例が、アール・ブリュット（以下A B）を考える授業（図1）や、茶道を通して日本文化を学ぶ授業（図2）だ。

A Bは、正規の芸術教育を受けていない人による、自由で無垢な「生の芸術」のことで、障がい者芸術と認識される場合もある。多角的な見方ができることから、生徒の思考力を深められる題材と考え、様々な専門家の講話や鑑賞を通して、学年の最後に小論文として自分の意見をまとめる授業とした。

茶道の授業では、茶器作り、和菓子のデザインをふまえて、自分たちの作ったものを使って御茶会を行い、一連の流れのなかで日本の伝統文化を学んでいる。茶器作りでは、生徒同士が仲間の作品に銘の付け合いもする。



アール・ブリュットの授業で生徒たちが書いた小論文。  
A4用紙にびっしりと自分たちの考えが詰まっている。



図1 『アール・ブリュットを知り、考える』授業の展開 (2016年度：2学年)

授業の目的

アール・ブリュットに触れ、創造することの意義や人としての生き方、在り方を考える。

授業の展開 (全14時間)

1時間 導入

アール・ブリュットに関する新聞記事を読んで、授業全体を通した自己のテーマを考える。



外部から様々な講師を招いた講話とアール・ブリュットの作品鑑賞 (授業ごとにワークシートを作成)。

ダウンロード可

6時間 鑑賞

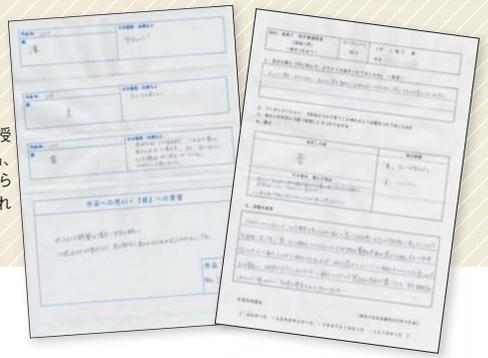


「アール・ブリュットについて知り、考えたこと」を各自が小論文にまとめ、お互いの小論文を輪読し、考えたことを語り合う。話し合いにより修正したい箇所を直し、小論文を改訂。



※仕上げた小論文は冊子として配付、展示

7時間 小論文作成



茶器の銘付けの授業では、自分の作品、他者の作品に込められた想いをそれぞれ言語化していく。

生徒はどう変わったか  
複眼的な思考と、いつか社会で役立つ兆しを得た生徒たち

外部の多数の専門家の話を聞いたたり、仲間の意見に触れることで、自分の見方や考え方が断片的・二面的であったことに生徒たちが気付いていることが、ワークシートや小論文から読み取れる。なかには、自分自身の視野の広がりだけでなく、自分と異なる意見の人の気持ちも理解できるようになったという生徒もいた。

図2 『利休と茶道～その形と心に学ぶ』授業の展開 (2015年度：2学年)

授業の目的

- 日本の文化と美の関わりについて作品制作や鑑賞活動、実際に使用することを通して深く理解するとともに、これからの文化芸術の意義や役割を考える。
- 千利休が目指した茶道の世界について学び、ものの考え方や生き方を知る。
- 文化芸術や美術に関わる様々な人々と直に接し、自らの考え方や生き方を見つめ直すきっかけとする。

授業の展開 (全12時間)

3時間 鑑賞

外部講師を招いての講話。茶道の歴史や展開、道具、作法、菓子、銘などについて学び、千利休が目指した侘茶の在り様や考え方を理解する。

外部から陶芸家を招いての実践授業。



4時間 陶芸

外部から和菓子職人を招いての実践授業。和菓子のデザインを考え、選ばれた作品は御茶会の際にプロの職人に実際に作ってもらう。



2時間 お菓子制作

自分の作った茶碗に、他の生徒たちに銘を付けてもらう。



2時間 茶器の銘付け

自分たちで作った茶碗、考えた和菓子(プロの職人が製造)を用いて、外部から招いた茶道家による御茶会の実践。

1時間 御茶会



今後行いたい授業  
外部から得た知見の成果を、学校の内外、地域にも伝えたい

現在3学年で、1・2年時にこれらの授業を受けた生徒たちの感想を下段に記した。いずれの生徒も小論文に苦労したり、絵を描かない美術の授業への驚きを語っていたものの、「将来何かの役に立つのではないかと思った瞬間が何度かあった」と答えていた。山崎先生も生徒たちについてこう語る。  
「高校で学んだことが何に役立っているかを実感するタイミングは生徒それぞれです。彼らが社会に出るのはまだ先で、高校は社会とつながる力のタネを蒔いている段階だと思います」

外部との連携授業の成果を学校の内外に伝えたいと山崎先生は考えている。「地域のそれぞれの分野で活躍されている方々を、『美術』という窓口から学校へ集めることができたので、今度はその成果を発信したいと思っています。そのことで、『高校』や『生徒たち』は『広い社会』と、『美術』は『暮らし』とつながるきっかけにもなると思います」

一連のプログラムを通して「茶道」における日本の、おもてなし文化を学ぶ



南さん

美術は息抜きのつもりでしたが、小論文で大きすぎるテーマをたててまともらず、絞りこむ作業など、めちゃめちゃ頭を使って頑張った感があります。茶器の銘付けで、必死に考えた銘を作者の子に選んでもらえたときは嬉しかったです。



田中さん

和菓子のデザインが選ばれて実際にプロの方に作ってもらえたのが嬉しかったです。正直、絵も描きかかったのですが、もの作り+考える授業で、芸術の幅や視野を広げてもらったと感じ、希望している国際関係の仕事に役立つと思います。



長船さん

「ABは障がい者アートなのか？」という疑問を中学時代からもっていました。人の話を聴くときもそのテーマで聴いていたので、小論文を書くのは大変だったけれど、自分の考えをまとめて順序立てて説明する訓練になってよかったです。



津田くん

「あれが美術の授業だったのか？」と思うこともありますし、小論文を書くのは本当にしんどかったのですが、たかさんの人の話を聞いているうちに、疑問に思っていたことに対して自分の意見がだんだん生まれてくることは面白かったです。



馬場さん

ABの授業で、みんなの書いた小論文の輪読は、人の意見を知ることができて面白かったです。「同じ講話を聞いても人によって感じ方や見方が違うんだ」と。美術で茶道体験などをやると思っていたのでびっくりしたけど楽しかったです。

授業を受けた生徒の声